

2 手紙の重さ

生きる決意を綴る

「私のかげがえのない『命』が救われました。感謝してもしきれません」。福島市の銀嶺食品工業で働く吉田孝行さん(三)の手元には、吉田さんから骨髄の提供を受けた男性からの手紙がある。吉田さんは一九九三(平成五)年にドナー登録し、その四年後に提供を行った。

吉田さんが「骨髄バンク」に興味を持ったのは、母親の看病がきつかけだった。病室には血液関係の病気で入院生活を送る人たちがおり、厳しい現実に接することもあった。そして「自分にも協力できることはないか」と考え、献血を始めた。献血三十回が過ぎたことを機にドナー登録に及んだ。

看病中には深夜ラジオに投稿していた。これが縁で、慢性関節リウマチの女性と知り合い「障害は個性である」と納得した。やがてリスナー同士は結ばれる。妻はドナー登録にも快く賛成してくれた。骨髄バンクからHLA(白血球の型)が一致したとの知らせが届くと、提供時の不安よりも「いよいよ」との喜びの方が広がった。

一、二次検査は福島赤十字血液センターで行われ、三次検査とインフォームドコンセント(十分な説明と同意)は保原中央病院であった。

コーディネーターが立ち会っての三カ月後の最終確認にも迷いなく応じたという。骨髄の提供は県立医大付属病院で行われ、小児科での骨髄移植を手掛けている菊田



「念願」だった骨髄提供を終え、ベッドサイドでくつろぐ
吉田さん(97年11月)

敦医師が採取を担当。約二時間かけて四力所から六五〇ccが採られた。

「最後の麻酔液が入って四秒後に天井がとけるように分からなくなつた。病室を四時間留守にして提供は終了。自分の思いが完結した瞬間だった」と吉田さんは振り返る。

二日後に退院し、一日家にいて、翌日には仕事に出た。職場も理解があり「移植を待ち望んでいる人がいる。遠慮しないで行きなさい」と有給休暇を出してくれた。

ドナー登録「もっと理解を」

退院して大橋進雄社長にお礼のあいさつにいくと「ありがとう」とねぎらわれ、むしろ驚いた。腰の痛みは三週間で軽快した。

少しでもドナーを増やそうと、吉田さんは「骨髄移植推進財団地区普及広報委員」などとしても街頭に立つ。「HLAが合えば、また提供します。それで移植を受ける人の命が救われる可能性が高まるのですから。骨髄移植をもっと理解してもらい、登録者を増やしたい」。

昨年十月には郡山市で集団登録キャンペーンを行い、目標の百人を上回る大きな成果があった。今年、二カ月に一回と間隔を短くしてこの集団登録を実施したいと吉田さんらは考えている。職場での登録にも力を入れたいという。吉田さんが提供した男性は関西に住む二十代の男性だったらしい。「希望を捨てずにいたら、幸運にも適合ドナーが見つかりました。信じられないくらい感激でした。気を引き締めてがんばりたい」。手紙には、感謝と生きる決意の言葉が綴(つづ)られていた。